

教 仏 庵 草

第215号
(発行日)

2008年5月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と

12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

後生の一大事

蓮如上人は後生の一大事と
いうことを強調された。それ
は後の世への一大事というこ
とで、この世の生の後、いわ
ば死後に私はどこへ行くのか
という問題である。

それは同時に、罪障を重ね、
煩惱の盛んな凡夫は、因果応
報の道理によつて、死後、苦
しみの世界いわば三悪道(地
獄・餓鬼・畜生)へ堕ちてい
くのではないかという怖れを
ともなう問題でもある。

死後、三悪道に落ちていく
かどうかはともかく、死後「
私はどうなるのであるのか。
どこへいくのか」という問題

は、室町後期の蓮如上人の時
代だけの問題ではない。現代
の、否いつの時代の問題でも
ある。しかも日本だけではなく
て古今東西の問題である。

そして、「私はどこへいく
のか」という問いは未来だけ
ではなく、「私はどこから来
たのか」という過去への問い
でもあり、また「そんな私と
はいつたいなにか」という問
題でもある。

そういうことからいうと、
後生の一大事とは「われわれ
はどこから来たのか、われわ
れは何なのか、われわれはど
こへいくのか」という一大事
であると言える。

実は、この問題を二十世紀
の偉大な思想家であるベルク
ソンも提起している。彼は
「多くの人間にとつて困った
こと、苦しいこと、情熱の対
象となることは・・・われわ
れはどこから来たのか、われ
われは何であるのか、われわ
れはどこへ行くのか。これら
は重要な問題」

であるといっている。
また十七世紀のフランスの
思想家であるパスカルは
「人々から自分および友人た
ちの名誉や財産についての心
づかいを全部取り除いてやれ
ばいいさ。なぜって言えば、
そうすれば、彼らは自分自身
を見つめ、自分が何であり、
どこから来て、どこへ行くの
かを考えることになるだろ
う」

といっている。この世での、
自分や他者の財産のこととか
いろいろな人間関係などへの
関心などを取り除いてしま
うと、外ばかりに向いてた眼が
今ここにいる自分自身をじか
に見つめるようになるだろ
う。そうすると、「自分は一
体なにである、自分はどこか
らこの世に生まれ、そして死
ねば一体どこへいくのだろう
か」と問うだろうとパスカル
はいうのである。

同じ問題を真宗大谷派の清
沢満之師がやはり問題にして
いる。師は

「いかに推考をついやすとい
えども、いかに科学哲学に尋
求すといえども、死後究極は
とうてい不可思議の関門に閉
ざさるるものなり。あに死後
の究極しかるのみにあらず、
生前(生まれる前)の究極も
また絶対不可思議の雲霧を望
見すべきのみ」
といい、続けて「自己とはな
んぞや」と問うている。

そして、この問題は思想家
や哲学者だけの特別な問題で
はなく、ベルクソンがいうよ
うに「多くの人間にとつて困
ったこと、苦しいこと」なの
である。

にもかかわらず、これがな
かなか自分の一大事にならな
いのはパスカルのいうように
「お金の問題とか人間関係な
ど、この世のさまざまなもの
への心づかい」いわば世間的
関心ばかりにとらわれて、自
分自身に向き合うことがない
からである。向き合えないか
らといってこの問題がなくな
るものでもなく、むろん解決
しているのでもない。向き合
わなくても「困ったこと、苦
しいこと」であり、根本的な
ストレス(苦)であり、いい
しれぬ不安として私たちのい
のちの全体を覆っているの
である。

われわれには解決せねばな
らないさまざまな問題が山ほ
どある。温暖化問題、核兵器
の問題、人口問題、民族問題、
貧困や食料の問題、人権問題
など課題はいくつもあ

る。人生と世界におけるさまざ
まな問題の中で、宗教固有の
問題とは何か。それが「われ
われはどこから来たのか、わ
れわれは何なのか、われわれ
はどこへいくのか」という人
生の根本問題であり、それが
後生の一大事というものであ
ろう。

正信偈に学ぶ問答

(四)

法蔵菩薩因位時

在世自在王仏所

親見諸仏浄土因

国土人天之善悪

建立無上殊勝願

超発希有大弘誓

(正信偈書き下し)

法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、

諸仏の浄土の因、国土人天の善悪を親見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。

(現代語訳)

法蔵菩薩の因位のとときに、世自在王仏のみもとで、仏がたの浄土の成り立ちや、その国土や人間や神々の善し悪しをご覧になって、この上なくすぐれた願をおたてになり、世にもまれな大いなる誓いをおこされた。

A 「世自在王仏の所にましまして、諸仏の浄土の因、国

す。そしてそのために仏の国を設けてその国に生まれしめて仏陀の悟りを開かせたいと願われ、そのような仏国はどのような国であらうか、どうぞ世自在王

仏様説いてくださいと法蔵菩薩は仰せになっています。*

A 「へもろもろの衆生の生死勤苦の本を抜かしめん」というのが法蔵菩薩の本にある願いなのですね。生死勤苦の本とはどういうことなのでしようか」

D 「生死とは生まれて死ぬる、勤苦とはなやみ苦しきこと、生まれて死ぬる苦しみのことです。その苦しきは無明・愛執という迷いの心から生まれてきますので、生死勤苦の本というのです」

A 「無明・愛執の心から生死の苦しみが現れてくるのですね」

D 「そうなのです。その苦しみはこの世かぎりではなくて、迷っているかぎり、生と死を繰り返しているのです。生死流転の苦と申します。聖人は無始流転の苦ともいわれたいです。この生死流転の苦が一切の苦しみの本であり代表

です」

A 「一切衆生の生死流転の苦を救いたいという広大な願いを起こされたのが法蔵菩薩なのですね」

D 「ええそうです。悟りを開き生死流転の苦が消滅し、智慧と慈悲の徳を完成した方を仏ともうしますから、全ての人を仏にしたいというのが法蔵菩薩の願心といていいでしょう」

A 「生死勤苦をどのように理解したらいいのでしょうか」

D 「私の今の了解ですが、生死の苦とは文字通り生まれて死ぬる苦しきこと、生まれて死ぬる苦をもう少し広げると、生まれて、老いて、病んで、死ぬという憂苦でしょう。これは生けるものの全てがもっている根本苦です」

A 「生死の苦は生きていられるすべてのものももっているような苦なのですね」

D 「ええ、身近なところで考えてみましょう。虫でも犬でも、生まれて命をもっているものは、皆「生きたい、生き延びたい」という生存欲いわば生に対する執着があり、逆にいうと死にたくないのです。生を愛し死を憎んでい

【電話相談室】

(秘密厳守・匿名可・無料)

(時間) 午前8時より午後10時まで
(電話)

0798-20-2112

(相談内容)

人生上のいろいろな悩み・
信仰上の相談・仏事の相談
*相談員が留守のときがありますので予めご承知ください。

るのです。それゆえ、どのような生きものも生き延びるために食(餌)を確保し、敵を恐れ、身を守ろうとされています。虫でもつつくと逃げます」

A 「そうですね。アブラムシでも餌があればやってきますが、人が近づくと素早く逃げます。生きのびたいのですね」

D 「だからどんな生きものでも殺されるのを避けようと、餌を常に求め、身の安全には神経をとがらせています。ただ人間においては「生を愛し死を憂苦する心」が自覚されるのです。そこに苦が自覚的になる。外の動物や生物は死を恐れているけれども、苦が自覚されないのではありません」

A 「人間以外の生きものは死ぬことはイヤでも、死をへ自

分の死」として苦しむことはないようにですね」

D 「そういえるのではないでしょう。そういう意味では人間以外の生きものは死を避けようとするが、死に対する不安を感じないのでありますよ」

A 「死の不安を感じないのなら人間以外の生き物の方が結構なことではないですか」

D 「そうは言えないのです。生まれて死ぬる苦しみを感じ、不安になればそこ、生まれて死ぬる苦しみから解放されたいという願いが起こり、それを実現することも出来るのが人間です。ですから他の生き物は、生死の苦から解放される縁が乏しいといえるのではないのでしょうか」

A 「人間に生まれたということは生死流転の苦から救われる大きな機会をいただいたといえるのですね」

D 「そうなのです。ですから人間に生まれたことはまず有難いことといえるのです。生まれて老いてゆき、病にかかり死なねばならないという、そこに大きな悲哀を感じ、不安を感じるのが縁となって救いを求めるのですから」

A 「生死の悲哀を感じれば

こそ、そこから解放されたいと願うのが人間なのです」

D 「ええ、その典型がお釈迦様でした。お釈迦様はもともと釈迦族の執政官(王)の跡継ぎ(王子)として、恵まれた環境で若き日を送られましたが、しかし老いて病となり死なねばならないという苦しみを深く自覚され、そういう憂苦から根本的に解放されたいと願われて出家されて、悟りを求められました。厳しい修行の後、悟りを開かれて生死の苦を克服されました。そこから仏教が世の中に起こってきたのですから、生死の苦を超える道が仏道の原点ですね」

A 「法蔵菩薩は、お釈迦様が実現したような生死の苦からの解脱を、一切衆生に与えたいと願われたのです」

D 「ええそうです」

(了)

雑記帳

私の肉体的ないのちは、最初は精子と卵子の結合による細胞から始まる

細胞分裂に起因し、やがて母親の胎内で増殖し、十カ月ほどして赤ちゃんとして出産される。このようにして細胞分裂を繰り返しながら大きくなっていくのであるが、その過程で脳が生まれて発達し、三ヶ月もすると目も見えるようになる。四・五歳にもなると脳は他の動物を遙かに超えた認識、思考能力を身につける。そうすると、心は脳の発達過程によって生まれてくるという理解がなされてくる。心は脳の神経細胞(ニューロン)の活動が生み出すものであるという理解である。生きる主体は私の認識であり判断であり意志であり感情であるのだから、心こそ自己であるといえるが、そんな自己(心)を生んだのは脳システムということになる。細胞が遺伝子情報にそって分裂し発達しいろいろな機能として身体を形成する、その中で脳機能が発達をし心を生み出すといわれるのである。だから、脳システムの停止いわゆる脳死は、心がその属性である脳機能を停止したことだから、それは「私の死」「自己の死」ということになる。

ここで問題は、最初に受精したのちに細胞分裂を繰り返して脳が形成されていくなかで、脳の神経細胞(ニュー

ロン)のシステムが生まれてくることは確かであるが、それが果たして心を生み出すのかどうかという点である。

ニューロンシステムは物質活動であり、その物質活動が心という非物質活動を生み出すなら、心は物質活動の中の属性であり、心も物質の活動に統合されることになる。この考えはいわゆる唯物論なのであるが、果たしてそうなのか、それとも他の考えはないのか。

一方、こうも考えられるのではないかと。物質ではない意識(心)の連続体が、父母の受精時あたりで、物質的なものと関わりを持つ、いわば人体にやがてなる細胞活動に組み合う、あるいは細胞と因縁をもつ、という考えも成り立つと思う。そうすると脳細胞が発達し、脳のシステムが活発化してくるというの、外界と心(意識の連続体)との窓口として、あるいは連絡の機能として、脳の機能ができあがっていくと言えないか。仏教でいえばこれらの脳の機能は五根に対応しよう。そうして外界からのさまざまな刺激を知覚する機能は脳の働き(五根)であろう。しかし、それを認識し判断し、価値づけるのは心すなわち仏教では六識で、これは脳の働きではなく心のはたらきであるといえる。また外界は仏教では境(五境)といわれている。境と根と識によって一切の経験が成立すると、仏教では説かれる。心は脳の働きではなく、脳にまで上ってきた外界の信号(情報)を読み取るのが心である。

そうすると心の連続体と細胞とが関わりを持ちだしたのが、受精時あたりとすると、死ぬという脳細胞の働きの停止は、脳と心の連続体との関わりがなくなることであって、心の死滅とはいえない。そうすると、心の連続体はこの世の前いわば前世から続いて、しかもこの世の身体の生命の終末(死)の後にもなお存続し得るともいえるのではなからうか。ただし、心の連続体を、実体を持ち一定の空間をしめるような魂とは違う。それは実体ではなく、今今と、世界と共に連続していく意識の流れ(波)というほかないものではなからうか。もしそうであるといくつかの疑問がはれてくる。欲望や怒りやねたみや人見知りなどのような意識が、生まれて間もない赤子の心にもあることもうなずける。また発達過程で、細胞にある遺伝子は身体の形成への指令であり、情報であっても、私の心の内容を決定する因子ではないこともすつきりと言える。遺伝子は心の情報ではなくて肉体形成の情報であろう。また、両親の遺伝子の掛け合わせが因となって私が生まれたのではなくて、過去の私(心の主体)が原因でこの世に生を受けたのである。だから私の誕生は私の責任であるといえる。親が私を造ったのではなく、神が造ったのではない。さらに、老人の認知症なども、これは脳システムの老化・減退によって外界と心の接続機能が衰えるのであって、心の老化ではないといえる。



リンネ草

信心夜話

《松並松五郎念仏語録を読む》三

太字は松並さんの言葉。

*

○念仏離れて、法話はない。実物見せても、念仏称えぬお方に、念仏聞かぬお方に、念仏離れて、念仏とはこんなことやと、話しても何にもならぬ。道理がしれただけのこと。

(口に出たもうお念仏が阿弥陀様の実物、阿弥陀様そのもの。このお念仏を離れてお念仏のお話を聞いても、道理が知れただけ、わかっただけである。知的に分かっただけの浄土真宗がいか身に実感されてみると、口に出てくださるお念仏ばかりがまことであり、お助けであることがおのずと知られてくる。しかし、これもお念仏を離れぬ聴聞あつてのことではなかるるか)

○出来る事は出来る。出来ない事は出来ぬ。出来ない事をああしたい、こうもなりたいと思うより、お前に出来る、と、仕上げて下さった仰せを聞き、南無阿弥陀仏と頂くこと。

(能力や志の勝れた方々の行動や行いに憧れても、出来ない私がいづも残る。出来ないことに憧れたり思い煩うよ

り、これはできるから、これを称えよと与えて下さるお念仏を称え、お念仏を聞く。これがこの上なき善になつていくのだと、仰せられるのであろう)

○あるお方「私の助けられる『道』は念仏より外はない」と。

後を言わずに(即ちこの念仏は如来の呼び声と言う事を)、念仏やと言うから、私が念仏する念仏になる、なつてくる。南無阿弥陀仏が活いきほとけ仏と、呼び声と説いて聞かせるお方がないから、ないので皆が迷っている。仏のなさしめ給う念仏と聞いていながら、なほかつ私が、自分がする念仏にしている。

(ただ念仏してとか、念仏一つとか、お念仏のお助けとか、よく言われるが、それから先を言わないと、真宗念仏とそうでない念仏との違いが分からずに迷う。真宗念仏はお聞かせいたたく念仏であり、(生まれさせる)という如来様の喚び声である。南無阿弥陀仏が喚び声と実感できないから説けないし、説かないのであろう。説かれないから、お念仏が大事とまでは聞いてもなお、自分がする念仏にしてしまう)

○偉くなるのではなく、仏様にだまされて念仏の阿保になるのです。南無阿弥陀仏

(愚かなものはお釈迦様にだまされ、

阿弥陀様にだまされて、本願のままを聞き受けるばかり。自分ばかりこいと思い、自分の知恵を働かそうとするから法が入らぬ。なかなか念仏の阿呆にはなれぬ)

○迷子が親に遇えた瞬間は言葉にかからぬ。如来様の仰せをおおぐ瞬間には教義はない。その後は教義にしたがう。「信」の前には教義はない。南無阿弥陀仏

(教義を学んで了解したこと、今それを全くたのみにせず、弥陀をたのむ。憶えた教義のハシゴはいらない。仰せを仰ぐだけ、仰せに順うだけ。不思議を不思議と聞くばかり。その後、人に話すときには教義がいる)

○水は方円の器にしたがう。水は器でない。「如来の本誓、機に応ず」

(変形できぬこんな器に、無碍光仏の水が応じてくださるゆえ、助かる。)

○東漸寺様の仰せに「念仏つとめる事と、世の中の姿に従う事と、その関係いかに」と。

「一人居る時、思いきり念仏申したらよろしいやないですか」南無阿弥陀仏

(社会に出て働く時には、お念仏の申しにくい場所や状況もある。口に出せ

ない場合もある。しかし一人になつたときは思い切り念仏すればいい。お念仏が出てくださるときも出ないときも、全体が阿弥陀様の中であり、常に阿弥陀様が私を念じずめである。一人の時は念じたもうお声を存分に聞かせてもらえばいい)

○仏法とは、どんなことかと思つたが、この口仏様に借してやるだけであつた。言いかえたら、この口はお阿弥陀様の口なれば、身も心も、お阿弥陀様のもの。この口借して上げるのではない。その口借してくれよと頼んでござる。身口意の三業は皆仏様のものなれど、私等は自分のものと思つているから、借してくれよと頼んでござる。

(松並さんのこのような信境はただお聞かせいたただけであつて、私のコメントなどを差しはさむことはできそうもない。仏法とはこの口仏様に借してやるだけ、とはずいぶん思い切つた言葉である。口は阿弥陀様のでどこ。口を阿弥陀様のでどこにしてあいにこられるゆえ、その口をかしてくれよとの阿弥陀様のお心。しかもお念仏ばかりが阿弥陀様のものでなく、称える口までも、いな身口意の三業までも阿弥陀様のものとの仰せ)

(了)



芋屑頭巾
(C)SHOGAKUKAN
INC.